部活動改革、その先へ ～地域で育むジュニアスポーツ～

「学校運動部活動」

今年度から3年間を「改革推進期間」として本格スタートした「部活動改革」――休日の部活動の地域連携・移行について地域の実情に応じ、可能な限り早期の実現をめざす。今号は、11の運動部活動中、8つの活動がスポーツ少年団へと移行する群馬県吉岡町の取り組みにフォーカスする。

〈連載〉第11回

【実に7割、主な受け皿はスポーツ少年団】スポーツ少年団の理念に共感 移行をフックに、町のさらなる活気づけも

今なお魅せられるスポーツ少年団の人材育成

群馬県のほぼ中央、前橋、高崎といった中核市に程近く、人口増加を続ける吉岡町では、〝1町1中（吉岡中学校）〟の特性を生かし、ひと足早く2022年度から移行を開始。背景にあるのは、地域でのスポーツ少年団（スポ少）への理解、コーディネーターの尽力、そして、移行を機に町全体の将来まで見据える発想などだ。

中心となって活動を進める同町教育委員会事務局生涯学習室の社会教育指導員、飯塚敏雄（いいづかとしお）氏が、そのねらいを語る。

「地域移行にあたっては3つのキーワード、①学校を含めた地域で子どもを育成、②持続可能な地域スポーツ・文化芸術活動体制の構築、③生徒・保護者・教職員・地域指導者・地域住民の思いを反映――を掲げ、さらに、この移行を機に吉岡の町をもっと活気づけたいという思いがありました」

「夢を持って動けば人はつながる。それはとても楽しいこと」と語る飯塚敏雄氏

そして、野球部、サッカー部など休日も活動する運動部の主な受け皿としてスポ少を選択。なぜか……。

「こころとからだを育てる――その理念は実に素晴らしく、指導者には長年の実績もある。また、今の保護者やスポ少のスタッフたちもスポ少出身者が多く、私自身、スポ少で指導経験もありますが、多くの関係者が活動の意義を理解している。今後、吉岡中の生徒もスポ少で活動することで将来、町で指導者をめざす子どもが出てくることでしょう。さらに、金銭的負担が少なく活動している点も、これまでの部活動と親和性がありました」

12にも及ぶ基本方針 腹を割った真の声

結果的に約7割の運動部はスポ少、町にスポ少がない運動部は町スポーツ協会専門部と連携。また陸上競技部は、町と包括連携協定を結び、オリンピアンも輩出する地元の実業団陸上競技部と連携した。さらに、これを機にダンスや弓道など学校にない活動や、囲碁・将棋などの活動にも参加できるよう体制の充実を図る。

と、至ってスムーズに事が運んでいるようにも映るが、実情はいかに。

「まず'22年7月に『吉岡町部活動地域移行検討委員会』を立ち上げました。委員のメンバーは、スポ少指導者を含む地域スポーツ団体関係者、中学校代表、保護者代表、有識者の16人で、計3回の検討会議を実施し、そこで12項目に及ぶ基本方針（別表参照）を策定、これが大きかったと思っています。別表の❶～❸は移行のねらいなど、また❺（大会参加）のようにこまごました部分にも言及し、現在も、この方針に沿って段階的に進めています」

生徒および保護者へは7月にアンケートを行った。

「ネガティブな反応も予想していましたが、移行を前向きに捉える声が、生徒約6割、保護者約5割に上りました。一方で、特に保護者からは『（賛成か反対か）わからない』という声もあり、周知不足も判明しました」

並行して部活動顧問とも意見交換した。

「6月末にすべての部活動顧問と座談会を実施。夏休み中の8月には各部顧問と事務局で話し合い、すると各部で実情が異なることを痛感し、ここで腹を割って話せたことが本当に参考になりました」

「スポ少と中学校がつながることで、保護者や指導者など地域の人の協力も得られるのがいいところ」と語る柔道指導者の小畑弥富氏（中央）

ケースバイケース、移行への温度差

さらに11月には地域指導者と顧問による意見交換会を開き、成果、課題が鮮明になる。

「両者、初対面のケースもあるなかで、移行への課題を共有できたことは成果であり、他方、移行への意識や知識に温度差があることも確かめられました」

一方で、柔道部や剣道部で休日部活動の移行の先行実施もスタートさせる。

「柔道部員はほぼ全員がすでにスポ少登録済み、かつ、日ごろから外部指導者として指導していたためスムーズに移行。剣道部も、スポ少団長が過去部活動の指導に関わっていたことから先行実施の対象とし、段階的に中学生もスポ少登録してもらいました。部員からは、『地域の人に教えてもらえるのはうれしい』などという声が上がる一方、『休日と平日で練習内容が異ならないか心配』などの声も聞こえてきました」

すんなり移行できるところ、一定の段階を要するところなど、部活動の形態によって多様な事情があることがわかってきた。こうした経験を積み、そして'23年度へ。

「7月に策定された『群馬県推進計画』をもとに8～9月にかけて『吉岡町推進計画原案』を作成。9月下旬以降、原案を検討委員会にはかり、11月に策定・公表しました。一方、生徒たちは9月に新チームとなり、柔道部、剣道部以外の生徒も吉岡中地域スポーツクラブ（スポ少への移行のための組織）に登録。各部、状況を見ながら段階的に移行を進めています」

「男子バレーボール部は町のスポーツ協会バレーボール部と交流会を開くなど世代を超えた関係もすでに生まれている」と坂本浩之氏

こう教えてくれたのは、今年度から同社会教育指導員となった坂本浩之（さかもとひろゆき）氏だ。

子どものため、町のために 勇気を持つ、夢を持つ

話を聞いていくと特に興味深い点が二つ。年3回、指導者研修会を実施予定で、かかる費用は県の地域スポーツクラブ活動体制整備事業から捻出。また、指導者資格取得費用は町の交付金を充てる。この機会にJSPO公認スポーツ指導者増のねらいがある。もう一つ、生徒や保護者にかかる負担、スポ少登録料やスポーツ安全保険料は町の交付金でまかなう。すなわち、3年間の改革推進期間中、指導者や生徒（保護者）には新たな金銭的負担の心配がない。

坂本氏は振り返る。

「地域のスポ少が受け皿となることを快く引き受けてくれたのは大変ありがたいことでした。また、飯塚の尽力で前年度から準備を進められ、その結果、指導者の研修機会創設やスポ少登録料の予算化もできました。一方、課題は、移行の周知・理解不足ですね」

課題はあるものの、なぜ吉岡町はここまで円滑にできているのか。

「まず、吉岡という町が〝1町1中〟であること。町に育てられた、町を何とかしたいという思いが多くの人にあり、賛同の声につながっています。そして、この思いをつなぐコーディネート役に飯塚が手を挙げてくれたことも大きい」

あらためて飯塚氏は述懐する。

「生徒、保護者、スポ少、顧問、すべての声に耳を傾けたこと、私も坂本も元校長と、事務局と学校が連携しやすい関係にあることも要因の一つかもしれません。ただ、何より勇気を持ち、夢を持って人々をつなげること。子どもたちのためという夢があれば、勇気を持って動ける。そして動いてつながれば、また勇気をもらえる。こうして進んでいけば、さらに活気ある吉岡町になるはずです」

大局を見て、動く勇気、志を持つ大切さ。振り向けば、そこにスポ少もあった。

バレーボール指導者の徳江道代氏（手前左）は「男子バレーボール部の今の顧問は私の教え子でもあり、良好な関係が築けています。競技の性質上、平日と休日の指導内容がうまくリンクするよう心がけています」と話す

■吉岡町休日部活動の段階的な地域移行に係る基本方針

❶「地域の子供たちは、学校を含めた地域で育てる」意識の下、持続可能で多様なスポーツ・文化芸術活動体制を整備
❷学校部活動の教育的意義を継承・発展し、新たな価値を創出できるような地域移行を推進
❸生徒・保護者・教職員・地域指導者・地域住民の思いを反映した地域移行を推進
❹部活動（休日恒常活動）の地域クラブ活動運営団体・実施主体はスポーツ少年団を核に準備
❺中体連の大会には「吉岡中学校の部活動」としての参加を基本とする
❻地域クラブの活動時間は、休日のどちらか1日3時間程度を基本とする
❼スポ少への地域移行は、現スポ少内への中学生部門設置を基本とする
❽部活動の現状や競技特性等を考慮し、各部ごとに無理のない時期・日程で移行を進める
❾地域移行推進は、地域指導者・部活動顧問・吉岡中学校管理職・事務局等での検討を基本とする
❿地域移行推進は、保護者の意見を十分考慮し、積極的な協力を仰ぐ
⓫文化協会加盟団体と連携して、中学生が地域の文化・芸術活動に参加しやすい体制を構築
⓬地域移行に関する情報を広く周知する（説明会、教育委員会ホームページ、学校便り等）

※原本をもとに編集部が要約

©2024 Japan Sport Association